

## シノリガモの黒子ちゃん – またの名を 異類の中の同類、同類の中の異類

動物への興味や、彼らを観察したい願望は私にとって早くから明らかになりました。最初は、それは学校の食事代を貯めて小鳥屋から買ったマヒワ、インコ、ハムスターやその他の小動物を飼うこととして現われました。その願望への子供時代の熱中は次第に動物学へと変わってゆきました。ハバロフスク大学の生物学教室に入学し、自らの専門分野として鳥類学を選択しました。そしてその時から鳥の研究が仕事になりました。さまざまな自然保護区で仕事をしていた年々、莫大な数の鳥が私の手を通してゆきました。それは捕獲して必要なパラメータを取り、鳥に足輪を付けて放すという、小さな交流のようなものでした。そしてある時、キズイルクムスキー自然保護区<sup>1</sup>での仕事の間、砂漠で何らかの軍事目的の任務についていた軍人たちが私に若い2羽のイヌワシを運んできました。鳥は人によく慣れていて、自力で餌をとることはまだできないように見えました。ワシの子たちは非常に衰弱していて、親たちに何があって、なぜ彼らがひとり残されたのかは、謎のままでした。軍人たちは鳥の面倒は見たがらず、もし私が鳥を受け取らないならば、どこか川ででも放すと言いました。これはワシの子にとって死の宣告と同じです。鳥を受け取って育て上げざるを得ませんでした。際立って目立った食欲を示すワシたちの餌を手に入れるのに丸々1か月かかりました。私たちの目的は将来鳥を野性に放すことであるため、私たちは家畜の肉を餌に与えたくありませんでした。そのためには彼らの野性環境での狩りの目標になり得る動物を捕まえざるを得ません。実験技師はハトの捕獲に携わり、私は落としわなでスナネズミを捕りました（集団生活を営むげっ歯類でクマネズミに似ており、毛は砂の色で尾はトビネズミのようです）。イヌワシの子が強くなった時、私たちは彼らを放しましたが、一週間程度は彼らは保護区事務所の近くにとどまり、私と実験技師が餌を与え続けました。その後イヌワシは飛び去りましたが、自然保護区内で定期的に出会い、私たちの努力が無駄にはならず、鳥たちが野性生活に戻ることであったことの証拠となりました。

鳥たちと接触している間、私はまるで並行世界の生き物のように彼らに接することに慣れました – 興味深く、魅惑的で、ある面は彼らから学ぶことができ、また私たちには与えられていない部分の内面にも触れることができます。そして生涯にただ一度だけ、短い間、この驚異の世界と触れ合えたように思われました – 私にその世界へと導いたのがカモ、シノリガモで、私たちと正しく家族の一員としてほぼ3年間過ごしました。

そして物語が始まります。



3日めの黒子ちゃん

1997年、私とマラート – 私の夫で同僚ですが – はブレインスキー自然保護区で研究をしていました。夏の始めには必要な装備と食糧を左右のブレヤ川の合流地点からそう遠くないところにある「ストレルカ」コルドン（森林保護見張り場）に運び込みました。私たちと一緒に5才の娘のカーチャとフォックステリアのクドリヤシカも乗って行きました。クドリヤシカには責任ある任務が負わされています – 野性動物をおどして追い払い、私たちに危険を前もって知らせることです。ついでに言えば、この任務を私たちの犬はいつも5点満点以上でこなしていました。設営を終えて、私たちはそれぞれ自分の研究テーマに合わせた資料を採取し始めました。マラートの仕事は動物地理学で、そのためほとんど毎日、研究のためのルートへ向かいました。私は鳥の換羽に興味があり、そのためには鳥を捕獲して生きたまま観察しなければなら

りません。そのため私たちはさまざまな環境に100メートルにわたって捕獲用の網を張ります。明るい時間帯は1時間半から2時間ごとに網を点検します。クドリヤシカはマラートと歩くことが多く、カーチャは私についてきていました。カーチャは生きた鳥を手を持つことがお気に入り、大きくなったら何になりたいとの問いかけには、彼女は自信を持って鳥を研究したいと答

<sup>1</sup>ウズベキスタンにある

えます。そしてある時、次の順番だったウマリタ-マキト川に沿って通じるルートから帰ってきたマラートは、バッグから5個のカモの卵を取り出しました。説明を聞いて、彼がシノリガモの放棄された巣を見つけたことがわかりました。前の日に強い雨が降り、巣が水に浸かり、卵が冷えていたので、マラートは戻って卵を計測するために全部の卵を持ち帰ることにしたのです。翌朝、卵の計測の後マラートはそれを割って中身をクドリヤシカに餌として与えることにしていました。しかしなんと驚くことに、観察すると割った卵の中の雛が生きていることがわかりました。もちろん私たちには彼を救うことはできません、というのは孵化までに一週間以上が残っていたからです。残りの4つの卵をどうすればよいのかとの問題が生じました。そしてカーチャは卵は孵化させる必要があるとあくまで要求しました。私たちがこれを試みない説得力のある論拠を見つけることはできませんでした。そして、私たちには孵卵器がないので、よい結果が得られるチャンスは高くないことは十分よくわかっていましたが、試してみることにしました。コルドンにはすばらしい浴室があり、薪も十分にありました。そして私たちは浴室が十分に孵卵器の役も兼ねるのではないかと考えました。卵は前もって底に苔を一面に敷いた箱に入れ、そこに温度計と、空気の湿度を保つための水を入れた小瓶を置き、上はガラスで覆いました。浴室は十分暖かく保て、一日に何回か少し火を焚きました。私たちはずっと浴室のそばにすることはできませんでしたし、もちろん夜は誰も面倒をみませんでしたので、私たちの巨大な孵卵器の温度は25℃から40℃の大変広い範囲にわたりました。自然界ではカモは巣を40℃付近の温度にずっと保つよういつも努めているのにです。しかし私たちの孵卵器のあらゆる欠点にもかかわらず、3日経つと2つの卵から小さい声が聞こえ始めました。4日目には声は強くなり、雛は十分お互いにずっと鳴き合っていました。その上に中からひっかく音さえ聞こえてきました。孵卵器の普通でない条件のために、中の雛が弱くて殻をうまく処理できないのではないかと、どういいうわけか私は考えました。助けることを決意して一つの卵を割って、黄色い袋の大きさから判断して私はそうしたことを大変悔やみました。雛はさらに2、3日は卵の中にいる必要があったのです。一つだけ残された卵の雛は黙ってしまい、まる一日生きている兆候を示しませんでした。そして一日が経過して声が再開し、引ひかく音が絶え間なくなりました。さらに一日後の朝に殻に小さな割れ目を見つけ、破ろうと一生懸命働きました。これに昼間中かかりました。夕暮れには卵から頭が現われ、私たちの我慢の限度を越え、私は雛を卵から出してやりました。湿った無力なものが光の中に現われました。カモの雛を箱に寝かせて部屋に移動させ、まだ暖かいストーブの上に置きました。夜は静かに過ぎてゆき、雛の声は聞こえませんでした。しかし朝に箱を開けると、ほれぼれするような、綿毛で覆われた生き物が、みじんだりとも恐れることなく私たちを見ているのを見つけました。雛の上部の綿毛はほとんど黒で、カーチャはすぐに彼の名前を考えつきました – 黒子ちゃん(チェルヌイシュ)です<sup>2</sup>。問題が生じました：今私たちがこの黒子ちゃんに何をすればよいのでしょうか？ この子を通りに連れてゆき、地面に放してみました。



5日めの黒子ちゃん

<sup>2</sup>チェルノまたはチオルノは黒を意味する接頭語

雛はためらいがちな、ふらつく足取りでカーチャの方に向かいました。彼はカーチャをママに選んだようです。なぜかは私たちには謎として残りましたが、おそらく彼女の丈が小さかったからでしょう。チェルニシがカーチャから離れることは1分たりとも望まず、彼女をすぐ後からどこへでも着いて行きました。最初の餌についての問題は簡単に解決しました。昆虫食の鳥の飼育の経験がありましたので、私はアリのさなぎ – これはときおり不正確にアリの卵とも呼ばれますが – がよい餌であることを知っていました。コルドンの近くにある小島に私たちは多数のアリのコロニーを見つけました。そして今はそこに張ってある網を点検に行く者が、小さな瓶にアリのさなぎを取って来るのが義務でした。カモの子は手からもらおうとせず、さなぎを水に投げる必要がありました。そして数秒数えるうちになくなってしまいました。こ

の子はまさに最初の日恐れることなく水に入り、浅瀬を申し分なく泳ぎ、そこでカーチャは全ての時間一緒に過ごすことを余儀なくされました。チェルニシが泳ぐ時は、頭をいつも水の下に入れて、嘴で小石をひっくりかえしてはみつかった水棲昆虫を平らげるのでした。なぜこのカモにこの種名（カメヌーシュカ）<sup>3</sup>が付けられたかが分かりました。2日目にはカモの子はすでに潜ることを試みて、その後一週間でこれを見事にこなすようになりました。カーチャは一日中黒子ちゃんとぶらつき歩くのに疲れてしまいましたが、黒子ちゃんは一人にされることを望みませんでした。黒子ちゃんがまだ完全に小さい間は、箱にカーチャの明るいピンク色のゴム長靴を彼のそばに置いて、彼をしばらくの間あざむくことに成功しました。雛はそのそばに座って静かになるのでした。しかし一週齢に達するとこの方法は役に立たなくなり、カーチャはいつもカモの子をそばに連れ歩くか、手に抱えている必要がありました。クドリャシュカにも深刻な問題が発生しました。フォックステリアと一度でも関わりを持った人ならば、この品種には果てしない勇気と、獣や鳥に対する抑えがきかない敵意の性質があることを知っているでしょう。実際にこの品種の性質は何十年にも渡って特別に育成されてきたものです。フォックステリアはイギリスで狐猟のために特別に育成されたものです。狩は簡単に言えば、犬を生きた狐の穴に連れて行き、犬はそこに入り、歯ですでに死んだ狐をくわえてそこから出てくるというものです。クドラシュカにどのようにしてカモの子を襲うのをやめさせるかを、私たちは知りませんでした。彼の自由を奪い、家の中にとじ込めて、通りに出すときは手綱をつけ、黒子ちゃんに襲いかかる全ての試みを強く制限しました。クドラシュカはカモの子をひつつかまえようとする試みをすると、避けられない罰が待っていることを次第に理解するようになりました。犬はカモが視界に現われるや否やしわがれ声を出して襲いかかるのをやめましたが、自分の本性を抑制することは辛いようで、この時は体全体が張りつめ、視線は絶え間なくカモを追い、後ろ足は興奮で震えていました。



10日めの黒子ちゃん

黒子ちゃんは私たちにどこへでも付いてきて、森に向かう時がもっとも大変でした。というのも倒木をよじ登って乗り越えていくことができなかったからです。次の障壁に突き当たると、助けを求めて訴えるような声を出し、ママのカーチャはいつも屈んで彼を助けざるを得ませんでした。黒子ちゃんは小川でカーチャと一緒に水浴びするのが大変好きで、その時彼女の背中にぴよんと飛び上がろうとするか、彼女の下に潜ろうとしました。ある時この水浴がたいへん残念な形で終わったことがありました－カーチャが水の下にいるカモの子をうっかり踏んでしまったのです。潜っていた彼が

現われた時、私は不幸な出来事が起きたことがわかりました。黒子ちゃんは歩けませんでした。おそらくは骨盤の骨を痛めて、片方の足はまったく動きませんでした。しかし大腿骨と下腿骨は無傷でした。その時はカモの子を手で運ばねばなりませんでした。この時の彼の泳ぐ様子はワルツを踊るのを思わせるものでした。というのは片側の足でしかこぐことができず、ずっと回っているままだったからです。外傷を負ったカモを見ながら、この苦難を終わらせてやるのがより人道的ではないかと思い始めました。そしてこの子の食欲がよいことだけが、また具合がよくなる可能性に希望を抱かせるものでした。そして実際、一週間ほど経つと黒子ちゃんは損傷した方の足でゆっくりと踏めるようになり、さらに2、3日すると全てが正常になりました。黒子ちゃんは3週齢になり、雛の綿毛は1か月齢の正羽に変わってゆきました。黒子ちゃんは最初の羽衣を身につけました。全ての若いシノリガモは雌の控えめな羽衣に似ているのです。実を言えばカーチャがカモの子に黒子ちゃんという名前を付けた時は、彼の性別についてはまったくわかりませんでした。そして黒子ちゃんは最終的にチェルニシカ（女性名）か何かであることがわかる可能性がありました。チェルニシの翼の羽が伸びて来たところで、私た

<sup>3</sup>カーメニが石の意味

ちは彼に飛ぶことを教え始めました。空中に放り上げると翼を広げて羽ばたかざるを得ません。10日ほどして黒子ちゃんはすでに短距離を一人で飛んで渡ることができるようになり、この時までにはクドリヤシュカはすっかり自由に放されていました。私たちの家は川の崖から30メートルのところにあり、そのため今では黒子ちゃんはクドリヤシュカからの脅威があればすぐに水面に飛び去って、完全に安全になることができるのです。黒子ちゃんは一方、もしクドリヤシュカが一人にいる時は、岸へ歩いていかないことを非常に早く理解しました。1か月齢に達するまでに黒子ちゃんは十分に自立して、森を散歩する時は私たちに同行することはなくなり、自分の適所にとどまる方を好みました。その時までには彼はそこで小さい魚を巨匠のように自分で捕まえることができるようになっていました。しかし私たちの誰かが岸に現われると、黒子ちゃんはすぐに泳いできて、私たちが立ち去らない間がそばにいました。黒子ちゃんは次第に近くの地域を我が物にし、私たちが川に出ていっても、そこに私たちの寵児をみつけることができないものの、「ピク-ピク-ピク」と（彼がいつも出していた声に似せて）しばらく呼んでみると、彼が呼び声に応じて飛んで来ることも稀ではありませんでした。しかし黒子ちゃんが昼にはいなくても、夕方ごとに家に帰り、私たちは彼を箱で寝かしつけていました。朝には箱を開けると彼はそこから飛び出し、私が彼に何かちよっと食べるものを与えるのを待っていました。それはたいてい米の粥に卵を入れたもので、その後川に出かけました。



黒子ちゃんと自分の群れ

このように一日一日が過ぎ去り、夏の終わりが近づいてきました。9月にはブレヤ川の泉からシノリガモの若鳥たちが浮いて流れてきます。そして私たちは、私たちの黒子ちゃんが群れのどれかに合流して、群れと一緒に越冬地へ泳いで行ってくれることをたいへん望みました。私たちは最初のグループが現われるのを一日千秋の思いで待ちました。そしてついにマラートがなんとかかけつけ、上流で流れにシノリガモの群れを見たと言いました。私たちは河岸に駆けより、木の後ろに隠れて起きていることを観察しました。遠くからシノリガモの群れが現われ、黒子ちゃんは彼の自然界の親戚がそばを通り過ぎるのに違いない、ちょうどよい浅瀬を泳いでいました。カモたちが近づいてきて、黒子ちゃんは彼らに気づき、餌をとるのを止めて警戒しました。シノリガモの群れが黒子ちゃんに追いついた時、群れは彼の方に泳ぎ寄ろうとしましたが、彼は向きを変えて急いで岸に身を埋め、そして群れはそばを通り過ぎました。私たちはそのようなことを想像していたものがっかりしました。というのは黒子ちゃんは自分をカモとして認識しておらず、生まれた時から人の間で暮らし、私たちを彼の群れであり、親であるとみなしていて、他のシノリガモは彼にとってよそ者だったのです。私たちの黒子ちゃんのそばを

シノリガモの群れが泳いで通る時はいつも彼は群れを無視するか、群れが彼に近づいてこないのに逃げだしました。9月中頃には黒子ちゃんに渡りの不穏が始まりました。本能が彼に生まれ故郷を離れる時だと耳打ちしたのです。彼は苛立ち、食欲が弱まりました。黒子ちゃんはいつも私かカーチャの方にやってきて、しつこく呼び声を出して私たちを川へと誘惑しました。私たちが彼の後をついて行くことに同意すると彼は喜びの声が早まり、私たちの前を走り、川の崖まで走り寄ると、彼は飛びたち水に着水して、私たちが彼の手本に従うのを待っています。まるまる一週間、彼は私たちに彼と一緒に渡りをするよう誘うことを試みることをやめず、一日中私たちのもとにやってきては不安気にぴいぴいと鳴きました。自らの説得がむなしく終わったことがわかり、黒子ちゃんは説得を止め、顕著にふさぎこむようになりました。この時期までに全てのシノリガモはすでに泳ぎ去り、私たちは黒子ちゃんは私たちと越冬することがはつきりしました－共同住宅の小さな部屋でみんな一緒に席につくことは大変なことは想像できましたが。本能との戦いは黒子ちゃんにはつらく、彼の食欲はまったくなくなり、彼は大部分の時間を岸で座って過ごしました。9月終わりには天候は悪化し、寒くなって最初の雪が降りました。私たちの哀れな黒子ちゃんが一人で岸に座り、彼が雪に埋まって行くのを見ているのは

堪えがたいほどつらいものでした。

チェグドムインへ戻ることを考える時が来ました。観察を終え、私たちは10月5日に荷物をボートに積み込み、ウソマハ川（ブレヤ川の支流）まで下り始めました。そこで保護区の車が私たちを待ち受けているはずです。下るのには2日かかりました。黒子ちゃんはこの間ずっと静かに箱に座っていました。車に乗り換えて7時間後、私たちは疲れ果て、凍えながらようやく町にたどり着きました。共同住宅に到着して最初の仕事は黒子ちゃんを箱から放すことでしたが、彼はすぐに飛び立って窓に突っ込みました。窓に密なブラインドで覆う必要がありました。黒子ちゃんは明らかに健康を害しており、何も食わず、水だけを飲みました。2日後、彼を動物病院へ連れて行きましたが、医者はどこにも病気はみつけれず、念のために抗生物質を指定しました。抗生物質を与えましたが結果は変わりませんでした。5日後にまた黒子ちゃんを獣医に見せ、水に消化酵素を加えましたが、これもまた役に立ちませんでした。カモがパンくずすら食べなくなって2週間が過ぎました。見かけはぞっとするものでした。かつては健康で、美しく、陽気だったカモから、骨と皮だけが残りました。もう少しすれば彼から生命の灯がすっかり消えてしまうでしょう。私は我慢できなくなり、黒子ちゃんに強制的に餌を与え始めました。1日に数回、細かくした鶏卵、小さくした煮た肉、にんじんの汁を染み込ませた粥の混合物を少量、彼の口に流し込みました。そのようにしてさらに一週間が過ぎました。自然保護区から、ようやく私たちに3部屋からなる設備のよいアパートが与えられました。後でわかったのですが一つだけ重大な欠点がありました—寒いのです。そのため、新しい場所に最初に手に入れたものは暖房器具でした。黒子ちゃんはすぐにアパートで一番暖かい場所を見つけ、暖房のそばに落ち着きました。そしてそのそばに横たわり、彼がどのようにしてこれほどの温度を我慢したのかかわからないぐらいでした。おそらくはこの暖房のおかげで、私たちがもうすでにほとんど願ってもいなかったことが起きました。このような24時間暖房を始めて2日経って黒子ちゃんが私の手から彼に押し込もうとしていた餌を自分でとったのです。この時から彼は回復に向かい始めました。一週間後、私たちの前に、過ぎ去った夏に私たちが楽しみながら観察したあのカモの姿が再びあったのです。

## 黒子ちゃんの2年目の生活



黒子ちゃんは健康になり、おもしろい行動で私たちを楽しませてくれました。しかし私たちの寵児の健康とともに、問題もまた生じました。鳥の生理に関係したものです。問題は、飛行に適応している全ての鳥では、とりわけ体重を軽くするために、骨の大部分は内部が空洞で、陸上動物が糞の塊を溜める直腸がほとんど欠如しているのです。このため鳥では頻繁な脱糞行動と糞が水っぽい特徴があります。私たちの黒子ちゃんもこの法則の例外ではありませんでした。アパートの中を移動する時にいつも足元を見なくてもよいよう、私たちはカモに一部屋をまるごと与えることにしました。幸いに居住面積の容量のおかげでそうすることができました。黒子ちゃんが冷えた床に座るのを好まなかったの

で小さなじゅうたんを敷きました。餌と水を入れる深皿を調達し、カモを部屋に閉じ込めました。しかし何が起こったのでしょうか！ 私たちのおとなしく従順な黒子ちゃんが反乱を起こしました：彼は大声で鳴き、助走してドアにぶつかり、全ての行動は彼が一人きりになることを望んでいないことを示していました。私はまる1時間、彼の激怒した叫び声や部屋で当り散らしているのを我慢し、最後には我慢できなくなり彼を自由の身にしてやりました。このようにして黒子ちゃんはずっと私たちのそばにいる権利を勝ち取ったのです。そして浴室には床を拭くための雑巾の山の用意ができていました。黒子ちゃんはいへん集団主義者で、家に私かカー

チャがいれば彼はいつも私たちのそばを動き回っていますが、私たちが出てゆくと、マラートの話によれば、ドアに近寄り、じゅうたんに座って待っていたそうです。そして私たちが戻ると、彼は私たちを変わらぬ「ピク-ピク」という声で嬉しそうに歓迎してくれました。なぜだかわからない理由で黒子ちゃんはマラートを無視し、その後クドリャシュカと親しくなったようです。ついでに言えば、私たちが飼った養い子の中で、黒子ちゃんはクドリャシュカが唯一明らかに好意を寄せたもので、他の小動物たちは彼女に狩猟本能を呼び醒ますのみでした。黒子ちゃんが犬の敷きわらの真ん中に座り、自分よりも何倍も大きな犬たちの喧嘩に恐れもなく関わり、凶暴なうなり声を上げてタイガの熊を追った私たちの落ち着かない犬が、自分が最も重宝している場所をカモに譲っているのを見るのはこっけいなことでした。友情は友情、しかしクドリャシュカは自分の深皿の餌は決して黒子ちゃんに近寄らせず、自分の餌を失敬する全ての企てを大声で吠えて阻止しました。さらにその上、もし誰も見ていなければ、カモの皿をきれいになめることを決して忘れず、黒子ちゃんの怒りに満ちた鳴き声には注意を向けませんでした。クドリャシュカは主人のいない時に長いすで休む、自分の悪い癖を黒子ちゃんに植え付けようとしていました：私たちが家へ帰ると、長いすでまろんでいる黒子ちゃんを見つけることが何度かありました。その時クドリャシュカは何食わぬ顔で自分の敷きわらに座っていたものの、長いすの上のカモのそばの暖まった場所は、犬が私たちが入る直前に叱られることを知って、重宝している場所を去ったことを物語っていました。無邪気な黒子ちゃんそこまでは思いつきませんでした。しかしクドリャシュカとは違って、そこへ登ってこないよう、長いすからカモを追いかただけで十分でした。黒子ちゃんはテーブルや他の家具に飛んで行くこともすぐに止めました。

成長して黒子ちゃんの愛着心が少し変わったようでした。私に明らかな好みを示し出し、まるで私の「尾」のようになって、私がどこへ行こうとも、私の後をついてきて、テレビの前にちょっと座って休むと、彼は私の足に落ち着くのでした。黒子ちゃんはひざに抱えられ、首の羽を次々と触ってもらう時が大変好みで、その時は彼は目を閉じて首を伸ばし、あらゆる様子が彼がどれほど喜んでいるかを示していました。黒子ちゃんの羽毛をよい状態に保つため、私たちは彼を定期的に浴槽で水浴させました。最初私たちは彼が泳ぎたくなるだろうと考えて浴槽を満たしましたが、これにはあまり喜ばなかったのも、私たちは彼にちょっと暖かい湯をシャワーから直接掛け始めました。水掛けの後は黒子ちゃんはほぼ一時間をかけて羽を乾かし、手入れをしていました。

健康を回復してから初めて黒子ちゃんはアパートを飛び回ろうとしました。私たちの2つの部屋は互いに向かい合っていて、黒子ちゃんは一部屋の窓敷居から別の部屋の反対側の窓敷居に飛び移りましたが、次第にこのような飛行練習はしなくなり、黒子ちゃんは長い間、自然が彼に与えたすばらしい贈り物である「飛ぶこと」を忘れました。

冬がやってきました。私たちは休養のために休暇に行きたいと思っていました。旅程は長く、ウクライナへです。クドリャシュカには問題はなく、列車で移動することには慣れていて、いつも静かに目立たないように行動し、別のコンパートメントの同行者は旅程の中程になってようやく犬が列車にいることに気づくほどでした。しかし黒子ちゃんについてはこういう事態でどうすればよいか私たちは知りませんでした。8日間の列車で彼を移動させることは難しいことはわかりました。そして自然保護区の監視官で、黒子ちゃんがいた時期にタイガで私たちと一緒にいて、私たちの養い子にたいへん同情されていたバレニユク・ゲンナデー・アンドレビッチが私たちに援助の手を差し伸べてくださいました。彼と彼の妻であるタマーラが私たちが旅行に出かける間、黒子ちゃんをひきとっていただけました。彼らから、私たちのカモはすぐに彼らの家に慣れ、彼らの小さな犬とも仲良しになったことを知りました。そして夕方にタマーラがひじかけいすに編み物に座る時は、黒子ちゃんは伴侶になり、ランプの下のカモのそばに落ちていました。お客さんに行きながら、黒子ちゃんは換羽を始め、休暇から帰ると、私たちが私たちのカモに「雄の」名前を付けたことは間違っていなかったと確信できました。黒子ちゃんは少年期の地味な羽色を換え、成鳥の雌の羽色に比べて雄のはっきりした羽色により似てきました。そして私はすでに、彼と一緒に自然の中で素晴らしい写真をどれほど撮れるだろうかと夢見ていました。

黒子ちゃんは少しずつ地域で有名になっていきました。これには学校の子供たちに私たちが授業をしたことが特に効いていました。ブレインスキー自然保護区のことを子供たちに話す時、私たちは「デザート」として箱からカモを取り出すと、子供たちの喜びは際限ありませんでした。黒子ちゃんは尊大に机の間を行ったり来たりし、希望者全てになでてもらっていました。

春が来て、計画では私たちは夏の間中ニマン川上流に旅行することになりました。6月初め、私たちはコルドンに向かいました。川は30メートルそばにありました。着いて最初に私たちがしたことは、黒子ちゃんを放すことで、彼はすぐに小川に向かいました。私たちが宿営しているところではニマン川は狭く(2-15メートル)浅く、小魚が豊富でした。魚を捕らえた黒子ちゃん、それは素晴らしい光景でした。地上ではのろのろと不器用ですが、彼は水中では素早く、敏捷な動きをしました。水が深くないため、狩りの様子は大変細かいところまで観察できました。そして黒子ちゃんは銀色の空気の泡に包まれ、まったく素晴らしいものでした。魚を捕まえて、彼は弾丸となって岸に飛び出し、石に打ち付けて魚を殺しました。時々川岸に死んだ魚を見つけましたが、これは黒子ちゃんが狩りに熱中して大きすぎる魚を捕まえ、飲み込めなかったことを意味しました。夏はずっと大きな出来事もなく過ぎました。各々が自分の仕事をしました：私とマラートは選んだ研究テーマの試料を集め、カーチャはできる範囲で私たちを手伝い、または邪魔し、クドリヤシュカは吠えて私たちの住处から野獣を追い払いました。そして黒子ちゃんは川で昼中を過ごし、夕方には必ず家に戻ってきて自分の箱に横たわって夜を過ごしました。夏の半ばに一度だけ記憶に残る事件がありました。私とカーチャとクドリヤシュカはニマン川の岸に座り、近くを黒子ちゃんが泳いでいました。突然彼が不安の鳴き声を出しました。私たちは彼の方に泳いでくる野性の雄のシノリガモに気づきました。私はクドリヤシュカを素早くおさえ、立ちすくんで何が起きるかを見ました。黒子ちゃんは川から上がり、私たちの方に来ましたが、野性のカモは自分の親類のこのような行動に驚き、私たちの前2メートルで泳ぎました。黒子ちゃんが彼と知り合いになることを望んでいないことがわかって、シノリガモは流れを遠く上流へと泳いで行き、私たちには永久にこの驚くべき瞬間の思い出を残しました。これほどの近さで野性の雄のシノリガモを見て、私たちは黒子ちゃんと比べてみました。そして比較結果は彼に有利ではありませんでした：羽色の明瞭さでは、彼は野性の同類には明らかに見劣りしていました。おそらくは羽の形成時期の餌の違いが影響したのでしょう。



秋が来ました。そして秋は黒子ちゃんにとってほとんど悲劇とも言える2つの事件で特筆されるものになりました。自然保護区の監査官たちが私たちのところへ来ましたが、その一人に大きな犬がいて、私たちのカモに吠えて飛びかかったのです。飼い主の呼び声にライカ犬は反応しませんでした。黒子ちゃんは冬から自分が飛べることを忘れ、全力でこいで追っ手より逃れようと上流に向かいましたが、犬が追いつきました。彼は向きを変えては逃げようとしていました。

黒子ちゃんが死の危険の中にいるのを見て、私は人生で初めて犬を狙って石を投げました。そして不思議なことに命中し、犬は金切り声を上げて追跡を止めました。黒子ちゃんは泳ぎ去り、私たちは捜索に出かけま

した。半時間の捜索の結果、怯えた黒子ちゃんを見つけました。私は彼を手にとり、家に持っていきました。翌日黒子ちゃんは川に出かけることを拒みました。私たちは彼がどこか傷を負っているようには見えませんでした。カモは明らかに健康を害し、好物のごちそう – 私とカーチャが川を歩き回ってで石をひっくり返して彼のために集めたトビゲラの幼虫ですが – を彼はいやいや食べたのです。黒子ちゃんは家で寝台の下で何日かを過ごしましたが、最後には回復してまた川に出かけました。一週間が過ぎ、またいやなことが起きました。私とカーチャは家にいましたが、マラートが走ってきて叫びました「お前たちがそこに座っている間に黒子ちゃんがタカに捕まった」。私たちが岸に走ると黒子ちゃんの姿がありません。マラートの話によ

れば、彼が川の方へ向かうと水にとまっているタカを見て、すぐに水中に黒子ちゃんがいて、タカは黒子ちゃんを持って飛び立とうとしているところとわかり、マラートは叫んで石を投げ、猛禽は飛び去ったとのことでした。私たちは哀れなカモを探しに出かけましたが、今回は早く見つけました。私たちのカモがまた病気になるのではと恐れましたが、黒子ちゃんは驚くほど急速に回復し、翌朝にはもう何もなかったかのように川に出かけました。そして足の水かきの小さな穴だけがこの不幸な事件をずっと思い出させてくれたのです。

私たちのフィールドワークの季節は終わりに達し、私たちはまたチェグドムインに移動しました。今回は黒子ちゃんは町への移動を自明のものとして会得しました。アパートでの越冬も事件なく過ぎました。1999年の夏は私たちはドゥブリカンスキー禁猟区への遠征を計画しました。そこを私たち黒子ちゃんが気に入るか興味深いです。

## 黒子ちゃんの3年目の生活



6月の終わり、私たちはいつものグループ、すなわち私、マラート、娘のカーチャ、そして一緒にいる動物全て－フォックステリアのクドリヤシュカとシノリガモの黒子ちゃん－はドゥブリカンスキー禁猟区のコルドンの一つへ向かいました。ブレインスキー山脈中央部の鳥類相の研究を計画していました。眺めてみて、私たちはここが黒子ちゃんにとってずっと大変な場所になるだろうとわかりました。その原因は隣の家の禁猟区の猟師にライカ犬がいて、黒子ちゃんを敵意さえ表して見るだけでなく、家は川から300メートル離れたところであって、川からコルドンまで広い曲がりくねった道が走っていて、両側に密に茂った草に被われていたからです。小路を踏みならしながら家へ向かう黒子ちゃん

は一日に何回か私たちのところへお客さんとしてやってくるのが好きで、夜にはいつも家に帰ってくる－そんなカモは、犬にとっても、ほとんどどんな猛禽類や地上捕食者にとっても簡単な獲物になることは明らかでした。問題はカモにとって走るだけなのは役に立たないことです－たとえ私たちのアパートでの生活が長く、私たちが予想したように黒子ちゃんが飛ぶ能力を失ってしまったからとしても。控えめに見てもこの1年半、私たちはこのカモが飛ぶのを見ていないのです。黒子ちゃんが昼に家へ歩いてくるのを避けるため、私たちはより頻繁に川へ彼を訪れ、何かおいしいものを持って行くのでした（黒子ちゃんは私は毎日焼いていた新鮮なクッキーが好きでした）。最初の日は全ては順調で、黒子ちゃんには昼にはやってきませんでした。翌日にはカーチャが小屋の窓から戻ってきて現われたカモに気づき、猟師のサーシャに叫んで彼の犬を抑えてもらうのに間に合い、黒子ちゃんは無事に私たちのところにたどり着いたのです。しかしすぐに、彼はおそらくライカ犬にばったり出会って、その脅威を感じることにになりました。おそらく衝突は川でも起きましたが、黒子ちゃんは犬に対しては危険の少ない場所でした。しかし、犬の本気ぶりを十分にわかって、彼は昼間私たちのところにお客さんとしてやってくるのを止めました。夕方の帰宅の際の黒子ちゃんの安全のため、私たちは最初のうちは手に抱えて家に戻りました。しかし黒子ちゃんはこれが気に入らず、自分で歩いて帰ることを望み、手に捕まらなくなりました。私たちは彼が水から上がってコルドンに向かいたくなるのを待たざるを得ませんでした。そして私とカーチャが護衛隊として出動しました。私たちがいると犬は黒子ちゃんに襲いかからず、彼はこれを理解して、安心して小屋まで歩き、玄関に飛び上がり、部屋まで歩いて夕方の分のクッキーをもらって箱に入って夜を過ごしました。

ドゥブリカンスキー禁猟区はこれまでの私たちが研究を行った場所とは違って、十分に賑やかな場所とわかりました。一日に何回かは私たちの宿営しているところの近くのドゥブリカン川を、うなる音を立てて燃料運搬車が横切るのです。黒子ちゃんはすぐにこれに慣れ、私た

ちがそばにさえいれば、エンジンのかかっている車の0.5メートル横を安心して通ることができました。釣り人、草刈りの人、きのこ狩りの人にもよく訪れました。このように人が多かったので、黒子ちゃんは以前に見たことなかったほど一層人付き合いがよくなりました。私たちの養い子の行動の変化については、運転手の一人から近くで出会った不思議なカモについて知らせてもらって知りました。彼の話によれば、川を越える前に休んで用意していた弁当を食べようとしたところ、なんと驚いたことに彼の方へ水からカモが上がってきて、一緒に分け合うのも悪くないよ、と明らかに告げたのです。この事件のおかげで、安全のために私たちは車の通行場所に、私たちのカモを傷つけないで、とお願いの張り紙をせざるを得ませんでした。今では掲示を読んで、このおかしいカモを見るために人々はわざわざ止まって行きます。黒子ちゃんはたくさんの人のところに泳いで行き、なでてもらうことさえありました。そしてお客さんからよく何らかのごちそうをもらったのです。彼は釣り人と一緒にいるのも好きでした。岸に立っている釣り人と近くを泳いでいる黒子ちゃんをいったい何回観察したことでしょう。しかしこれは彼の命にかかわりかけたことがありました。川で釣り人たちが夜を明かし、朝には釣りを終えて立ち去りました。昼に私が川に私たちの養い子を訪れに行くと、嘴から突き出た長い釣り糸を見つけました。糸を引き抜こうとする試みは成功せず、おそらく反対側に釣り針があって、そのうえ深く突き刺さっていたのでしょう、そ嚢を触ってみても針がみつかりませんでした。単に嘴の糸を切って、針が糞の中に出てくることを待つことしかできませんでした。1時間後、黒子ちゃんの具合が悪くなりました。私は彼を家に連れ帰りましたが、夕方にはほとんど起き上がれなくなり、首を回すこともできず、哀れに少し鳴くだけでした。夜には彼をつらい気持ちで箱に入れました。私は一晩中眠れず、箱から聞こえる音を聞いていました。朝までに黒子ちゃんは静かになりました。その日は長い間、息の止まった小さな体を見つけるのが怖くて、箱を開ける気が起きませんでした。しかし、どれほど驚いて喜んだことでしょうか、箱を開けるとすぐ、何事もなかったかのように黒子ちゃんが飛び上がり、いつもの朝のようにクッキーを欲しがり始めました。ちょっと食べて彼はドアの方へ向かい、川に行きたいことをわからせようと思いました。嬉しいことに私たちは3人で彼の後について川に行き、その日はいつもより頻繁に彼を訪れに行きました。しかし針はどうなったのかはまた謎として残りました。箱には見つけれませんでした。この事件の後、私たちは釣り人にチェルニシュを遠くに追い払うか、別の場所で釣りをしてもらうように頼むようになりました。彼らは私たちの願いをわかっていただけで、黒子ちゃんはそれ以上釣り針にかからないようになりました。

ドゥブリカンでも、ニマンと同様、黒子ちゃんは私たちの宿営地から遠くまで泳いで行かず、川での彼の移動半径は200-250メートルを超えませんでした。川に着くと私たちはいつでも私たちの養い子をみつけるとができ、彼は私たちを見つけると急いで会いにきましたが、その際彼はいつも足だけでなく翼も使って急いでこいで来ます。私たちの方はその都度彼の方に出向きながら、何かおいしいものを持っていくようにしました。全ての贈り物の中で、黒子ちゃんはキリギリスが特に好物で、7-8月には川に通じる道路で大量にみられるのです。10-15ほども食べると、彼は満足して羽の手入れを始めましたが、時々私たちの前で変わった動きを示しました。私は彼が求愛ダンスの要素を示しているのだと理解しました。しかも私と彼と二人きりの時だけです。私が彼の動作をカーチャやマラートに描写すると、彼らにはそのような行動は全く示さないと言いました。そして彼はさらに奇妙な続きの動作をしました。羽をきれいにした後、黒子ちゃんは私の前の水面に泳ぎ出し、水に沈み始めました。その時にばたばたさせている足はシンクロナイズドスイミングの選手のように上に突き出し、体のほとんど大部分と頭は水中にあったのです。この動作を何度か行ってから、彼はよく水中で翼を打ち、たくさん小さなしぶきを巻き上げ、光線条件によっては黒子ちゃんの上に小さな虹が現われました。次の要素を私は「急速潜水」と名付けました – 黒子ちゃんは水中で速度を増し、そして不意に水面に現われ、そしてすぐ水中に戻り、これを何度か連続で繰り返すのです。動作は水面を駆けて終わりました。それはあまりに目を見張り驚くべきものでしたので、何か謎に満ちた驚くべきものに遭遇したような感情がほとばしりました。

9月が近づき、カーチャが初めて1年生のクラスに入る必要のある日が来しました。私は自分の研究を終わらせたくありませんでしたが、この大切な日のために彼女と一週間チェグドムイ

ンに向かうことにしました。黒子ちゃんと一緒に連れて行くことにしました。マラートはほぼまる一日調査ルート歩くことが多く、見張りのない状態のカモを残してゆきたくなかったからです。カーチャの初めての学校生活を祝った後、私たちは9月7日にドゥブリカンに戻りました。夕方の、しかしまだ明るいうちに到着し、黒子ちゃんをしばらく泳がせようと放すことにしました。そして黒子ちゃんは私たちを次のように驚ろかせてくれました：箱から飛び出し、走り出して、そして飛んだのです。私たちは口をぽかんと開けて彼が行く方を見ていました。というのは私たちは1年半の間黒子ちゃんは自然から与えられた素晴らしい贈り物 – 飛ぶこと – を忘れていたと固く信じていたからです。その日から私たちのカモは歩いて家から川までのルートを克服するのをやめました。玄関から飛び降り、黒子ちゃんは助走して飛びたち、私たちは彼がこれを成し遂げるのを飽きることなく見ていられます。飛ぶ黒子ちゃん – それはまったく見事で見慣れないものでした。



黒子ちゃんと連れ合い

9月20日、私とカーチャはすでにチェグドムインに遂に戻らねばなりませんでした。マラートはさらに10日間とどまって秋の渡り鳥の観察を終わらせるつもりでした。食事の後、私たちのところに車が来ました。車に物を積み込み、私は黒子ちゃんと一緒に連れて行くため探しに出かけました。しかしカモが見当たりませんでした。私たちが川に出て、彼を見つけられないのは初めてのことでした。まるまる1時間、私たちは岸を歩き回ってカモを呼びました。運転手がもう待てない様子だったので、私たちは重い気持ちでドゥブリカン禁猟区を後にしました。翌日マラートと無線で連絡をとると、黒子ちゃんは夕方いつものように戻ってきて家で寝たとの知らせで、私たちを喜ばせてくれました。

この日から無線機の故障でマラートとの連絡が途絶えました。9月30日、彼のところに車を差し向けて、私たちが帰ってきた彼に最初にした質問は「黒子ちゃんは連れてきた？」で、彼が「いや」と答えると、カーチャはわっと泣き出し、クドリヤシユカは夕方中マラートの持ち帰った物を嗅ぎまわして自分の相棒を探しました。

マラートはドゥブリカンでの滞在の最後の数日と黒子ちゃんの様子を次のように語ってくれました。黒子ちゃんはマラートが禁猟区を離れる3日前にいなくなりました。その週は二人だけでいて、黒子ちゃんは朝に川に出かけ、昼間中いなくなり、夕方遅くによろしく寝に帰ってきていました。黒子ちゃんがいなくなる数日前に彼に野性のシノリガモが近寄ってきました。色から判断して雌か、若い雄でした（色で区別するのは困難です）。最初のうちは黒子ちゃんはいつものように彼女から逃げていましたが、このカモはうらやましいほどつきまとい、夕方には黒子ちゃんにほとんどコリドンまで見送りに来ていました。そしてその後川に戻って、そこで朝まで彼を待ったのです。数日後すでに、黒子ちゃんは野性のシノリガモと並んで平穩に泳ぎ、このカモは彼と友達になることに成功したのです。その後黒子ちゃんは全くいなくなりました。マラートは、彼はオオタカの獲物になったのではと推測を述べました。ちょうどそのころ多数のオオタカが渡り去るころだったためです。私とカーチャはより楽観的な仮説を支持したい考えでした。それは、野性の自然が黒子ちゃん取り戻し、彼は彼女と自由の泳ぎへと旅立ったというものです。

1年半が過ぎ、2001年の春がやってきました。私たちはダルビンキー自然保護区に仕事に行くために集まりました。切符はすでにあり、出発まで数日を残すのみでした。そして通りでドゥブリカンスキー禁猟区の長であるユー・エヌ・チェレシユネフと出会い、私たちは驚くべきニュースを知りました。もう2年間 – 昨年の夏はずっと、そして今年の春、ドゥブリカンで私たちの宿営地の近くで人々がシノリガモの雄を見かけ（彼のそばに時々雌が見られました）、驚くべき信じやすさと人への警戒がまったくない点で際立っている、とのことがわかりました。間違いありません – これは私たちの黒子ちゃんです。この上なく残念なことに、私たちには彼と出会う機会はありませんでした。しかし黒子ちゃんが故郷の場所に戻り、野性の自然の中で

の生活に適応していると考えただけで、私はずっと嬉しく思っています。私たちの黒子ちゃんは、異なる者の中での自分であっただけでなく、自然の力は彼をそうあるべきであった同胞の中に置いたのです。

## 注記

この文章は、ロシア、ハバロフスク地方のブレインスキー自然保護区のページ  
<http://old.zapbureya.ru/biserov/litrpage1.htm>  
から原著者の許諾を得て翻訳、転載したものです。